

平成18年度
水源地域対策アドバイザー派遣制度報告書

1. 市町村の概要

(1) 市町村名

奈良県川上村

(2) 派遣対象地域

大滝ダム周辺及び紀の川源流

(3) 村の現状

奈良県南部、吉野川源流に位置する。東に台高山脈、南に山上ヶ岳や大普賢岳などの山々に囲まれた美しい村で、後南朝ゆかりの地としても有名である。面積は約 270k m²、そのうち 95%を森林が占め、さらにそのほとんどが吉野杉を産出する人工林で、日本三大人工美林に数えられる。川上村は吉野林業の中心地として栄えてきた。しかし林業は国際化等が進む中において全国的



図-1 奈良県川上村位置図



写真-1 良質な人工林

に低迷を続け、林業の低迷は構造的な問題とともに、若年層の一次産業離れ、就業者の高齢化等により悪化を続ける傾向にある。本村においても昭和40年頃までは7,500人を超えていた人口は、現在2,000人弱、高齢化率は約46%となっている。

1959年に襲来した伊勢湾台風は、本村にも大きな被害を与え、これを機に国土交通省の大滝ダムの建設が決定され、工事が始まり、それから40年以上の時を経ても、試験湛水時に発生した地すべりへの対処などにより、未だダム整備事業は完了していない。

(4) 村の活性化のための取り組み状況

このような流れの中で、川上村は“樹と水と人の共生”をキャッチフレーズに、個性的で魅力ある「水源地のむらづくり」を進めてきた。その特徴は観光と環境を軸とした取り組みにある。

観光面では、吉野山、大台ヶ原や熊野方面など周囲の観光地とのネットワークを図りながら、本村独自の集客資源として木工の文化や技を伝承する展示・体験施設、釣りを楽しむ施設を整備し、それら観光の核となる「ホテル杉の湯」「ホテル五色湯」を設けた。全国そまびと選手権大会や樹と水と人の共生フェスタ等のイベントなどで村の取組みのPRも行ってきた。

これと併行し、川上村の資源として欠かせない自然環境を活かした村づくりにも取り組んできた。かつて日本の住文化を支えた歴史ある杉の人工林を維持する重要性とともに、川上村は吉野川紀の川の源流であり、この村で生まれるきれいな水を守る使命があると考えている。この理念を1996年8月「川上宣言」として表した。そしてこの精神を下流、都市の住民との交流の中で表現していくことを目指している。平成14年度には源流部の500年以上も人の入らなかった天然林約740haを村が購入、財団法人吉野川紀の川源流物語を立ち上げ、その保全及び普及啓発とともに、先人たちが重んじてきた暮らしの形態を学ぶことを目的とした「森と水の源流館」を開設した。



写真－3 森と水の源流館



写真－2
吉野川（紀の川）源流水源地の森

川上村は和歌山市を貫流する紀の川の源流地で、和歌山市との間で平成15年に「水源地保護に関する協定書」を締結。翌16年度から3ヵ年事業で、国土交通省の補助事業を受けながら、「流域協議会の展開」「人的交流」「和歌山市民の森づくり」に取り組んでいる。

(5) 村の活性化に向けた課題

超高齢化・過疎化を背景に、村が活性化を進めるには、「水源地の村」を強調し、紀の川の流域住民の理解と協働を求める必要がある。現在、森と水の源流館を拠点とした市民レベルでの連携、あるいは「吉野川紀の川流域協議会」と称する横断的な行政組織を設けて、流域連携・交流に努めているが、取り組みに対して、それぞれ温度差もあり、十分な成果を得るには至っていない。

(6) 希望するアドバイス内容

既に立ち上げられた「吉野川紀の川流域協議会」を活かしながら、さらに流域における市民レベルの実働的な活動やネットワークへと展開し、水の恩恵を受けている源流地域に意識やマンパワーを向けるためには、どのようにすればよいか。

2. 水源地域対策アドバイザー派遣概要

(1) 第1回水源地域対策アドバイザー派遣概要

開催日時 平成18年9月28日(木) 15時～17時

開催場所 森と水の源流館にて

参加者

水源地域対策アドバイザー	松村 紅実子	
国土交通省水源地域対策課	課長	渡辺 信一
	計画係長	八丈 裕己
奈良県 資源調整課	主任調整員	牧浦 啓之
	主任主事	中村 健太郎
川上村 企画財政課	課長	坂口 泰一
	主幹	森内 太
	主幹	中川 雅偉
森と水の源流館	事務局次長	尾上 忠大
	主事	木村 全邦
	主事	成瀬 匡章
	主事	黄瀬 桂子

議題

- ・ 川上村及び村づくりについての紹介
- ・ 吉野川紀の川流域協議会の経緯と現状について報告
- ・ 森と水の源流館の取り組みについて報告

会議の内容

アドバイザーより、森と水の源流館への印象

- ・ 大人を対象としているか、子どもを対象にしているのかが不明瞭。
- ・ (館としては、特に絞り込む必要はないとの考えを述べる) 年代的な対象を絞るか、地域や流域の対象を絞ったほうが、伝わりやすいのではないか。
- ・ 「森と水の源流館」という名称も硬いので、親しみやすい愛称などあればいいのではないか。
- ・ 広報物もいろいろ作っているが、子ども向けになっていない。立派すぎ

る、字が多い、ビジュアルに訴えるものが必要。

- ・ 自分たちで費用を捻出していかなければいけないという意識を持たなければいけない。補助金体質に甘えてしまっはいけない。



写真－4 第1回派遣時の協議
森と水の源流館にて

アドバイザーより、流域協議会への印象

(流域協議会は、今のところ各自治体の思いや、目的の捉え方が異なっていて年1回のシンポジウムの開催に留まっているという報告に対して)

- ・ 行政だけでは難しい。NPOなどの活動団体が加わってくると具体的な活動へと展開は広がる。
- ・ 流域で活動するNPOなどを発掘することからはじめてはどうか。

アドバイザーから事例を紹介

- ・ 県下の川で活動する女性たちでNPO法人を立ち上げ「子ども川大使会議」を仕掛けた。
- ・ 大分は複数の川が入り組んでいるので、いろいろな人材が集まる。
- ・ 流域の音のマップを作った。
- ・ 川を知ったり、川を遊びの視点で捉えることもよい。
- ・ 森と水の源流館の現状は「硬い」という印象を受ける。



写真－5 第1回派遣時の協議
森と水の源流館にて

- ・ 「カッパマネー」という流域エコマネーに取り組んだ例もある。
- ・ 専門分野も必要だが、そこばかり見ているはだめ。
- ・ 流域連携の地域づくりは、3Kすなわち「広域」「回遊」「交流」である。
- ・ 現在の「源流」の取り組みは、下流に向けての単一方向の努力にみえる。「正しい」と思ってやっているに違いないが、下流に伝わっているか？
- ・ イベントもたくさん行っているが、提供するだけでなく、訪れた人が何かを落としていく仕掛けが必要。

(2) 第2回水源地域対策アドバイザー派遣概要

開催日時 平成18年12月7日(木) 15時～17時30分

開催場所 森と水の源流館にて

参加者

水源地域対策アドバイザー	松村 紅実子	
国土交通省水源地域対策課	課長補佐	原野 崇
川上村 企画財政課	課長	坂口 泰一
	主幹	森内 太
	主幹	中川 雅偉
森と水の源流館	館長	辻谷 達雄
	事務局次長	尾上 忠大
	主事	木村 全邦
	主事	成瀬 匡章
	主事	黄瀬 桂子

議題

- ・ 流域交流・連携にかかわる活動について、森と水の源流館担当者から報告
- ・ アドバイザーからの意見

会議の内容 (アドバイザーからの意見)

流域連携に対する体制

- ・ 川上村としての「流域連携」にあたり、森と水の源流館が窓口となっているのか。すべてを源流館で、また源流館のスタッフのみでということは困難であるように感じる。
- ・ 逆に「流域連携」の観点では、もっと多くの人々を迎える必要がある。源流館の事業だけでは、対象が限られてしまう。
- ・ 源流館の事業では、偏った人々との交流になっている。一般の人々が満足する何かが必要。ただしそれが源流館の役割であるかどうか？その意味で冒頭に質問をした。
- ・ 流域市町村でも行政に頼らず、民間のキーマンをさがし、いかに取り込んでいくかが重要である。まずは中間のリストアップから始めてみてはどうか。

森と水の源流館の課題・アイデア

- ・ 広範囲で事業を進めているが、テーマ、目標を絞ることは大切である。たとえば「今年は、川上宣言の○番目の項目を具現化することに集中する」などの発想もよい。
- ・ 源流館が流域連携の起点となるようにする。

- ・ ネーミングはとても重要である。紀の川・吉野川を統一した、任意の川の名前を公募で決めて、あらためて流域をとらえなおすきっかけにすることも考えられる。
- ・ 水・川の大切さを知るために、家の前の川を調べて、発表する機会があってもよいのでは。
- ・ 「和歌山市民の森づくり」に対しては、各回ごとに参加者の居住区域を限ってはどうか。後のコミュニティの構築につながりやすい。また知らない人を連れてくることや、リピーターにはステップアップのコースを設けるなどの工夫も必要になる。村内の他の施設（ホテルや温泉など）を絡めていくこともポイント。
- ・ 学校に対しては、先生のためのPR、体験の機会提供などを行う。流域の学校からは、順番に必ずやってくるような仕掛を考える。
- ・ ミュージアムネットワークに向けては、クイズスタンプラリーなどから始めてはどうか。クイズは地域を考える機会になる。
- ・ 企業に対しては、募金の呼びかけを行い、協力いただいたところは、村内の施設の優待があるなどのメリットを打ち出す。
- ・ スタッフ各人が、今やりたいことに焦点を絞ってはどうか。
- ・ 訪れた人が「足跡」を残す方法。たとえば植樹など、子孫に見せて、伝えることができる内容のもの。



写真-6 第2回派遣時の協議
森と水の源流館にて

地域づくりの視点

- ・ マンパワー不足に対しては、スタッフをサポートするボランティアが関わることが望ましい。特に地域の人々が関わることが大切である。
- ・ 村が栄えるために、村の人々が関わることができることを広げる。たとえば観光客等が「食べたり」「買ったり」する部分での「関わり代」（収入）は多いはずだ。
- ・ 村内の人材について調査をすることを薦める。得意分野や無償でよいか、有償を望むかなどを把握しておく。
- ・ 協力を依頼するときは、個人名ではなく、村長名などにするなど、村全体で協力を求めることで、価値を感じ、やりがいの度合いも高くなる。
- ・ 村内在住だけでなく、村出身者を追跡してみるのもよい。
- ・ 「食」をテーマにすれば、地域の女性がかかわるチャンスが生まれる。

村全体で取り組むべきこと 村内他の施設との連携・分担

- ・ 川上村には、専門的な施設が多いが、ネットワークができていない。
- ・ 村内施設間のネットワークは、クイズラリーやスタンプラリーなど、簡単なことからでもよいのでは。ただし楽しさ、おもしろさが必要。現状では、おもしろさに欠けると感じる。
- ・ 地元の人々が求めてくれるものでないといけない。地元の人々に望まれていないことは、外からの人にもわかってしまう。
- ・ 「PRキャラバン」では、何をPRするのか。村の観光PRをいっしょにやるべきである。

大分での取り組み事例

- ・ 大分では、子ども川大使会議などを行った。
- ・ 「リヴィエラ・ウエス」と題し、ボロ布を配り、食器を洗う前に汚れをふき取る運動を流域に呼びかけた。
- ・ 川を道具に楽しくイベント化し、多くの人を巻き込む。
- ・ 自分が楽しくなることが、やることの第一条件だ。

資料提供

- ・ 筑後川流域 1 万人会議
- ・ 九州川のオープンカレッジ
- ・ くまもと川の女性フォーラム 2006
- ・ (産業興し実験) クリスマスリース (木箱+リース+カボスなど)



写真-7 第2回派遣時の協議
森と水の源流館にて

(3) 第3回水源地域対策アドバイザー派遣（報告会）概要

開催日時 平成19年3月15日（木） 14時～16時00分

開催場所 川上村役場第一会議室にて

参加者

水源地域対策アドバイザー		松村 紅実子
国土交通省 水源地域対策課	課長	渡辺 信一
奈良県 資源調整課	主任調整員	牧浦 啓之
	主任主事	中村 健太郎
川上村	助 役	栗山 忠昭
収入役		春増 公文
	総務課	辰己 龍三
	住民福祉課福課	課長 福井 敏夫
	林業建設課	課長 中居 清重
	産業振興課	吉田 志帆
		大前 卓巳
	教育委員会	梶嶋 恵子
五色湯	課長	梶嶋 亮太
ホテル杉の湯	課長	大藪 眞也
(財)グリーンパークかわかみ		喜家村 玲子
川上村（事務局）企画財政課	課長	坂口 泰一
	主幹	森内 太
	主幹	中川 雅偉
森と水の源流館	事務局次長	尾上 忠大

議題

- ・ 映像等を用いた事例の紹介
- ・ 流域連携に対するアドバイス
- ・ 宿泊施設等に対するアドバイス

会議の内容

事例紹介

- ・ 自己紹介と「NPO法人山香郷」設立ならびに指定管理者受託に至る経緯。
- ・ 福岡県と大分県の境にある山国川での大綱引きイベントの紹介（ビデオを用いて）。その後も、アメリカや北海道などでもこの綱引きを行っている。
- ・ 大友宗麟を学ぶ会の紹介。歴史に注目した取り組みで、歴史はどの地域



写真-8 第3回派遣時の報告会
川上村役場にて

にも存在するが、それをどのように活かしているかによって違いが生じる。歴史を大切にすることで地域の人々も応援してくれる。(活動をスライドで紹介)

- ・ 大分県の流域連携の取り組みの紹介
- ・ 大分川でのNPO法人おおいりベイラ（女性による大分県内での河川にかかわる活動のネットワーク）の紹介。
- ・ 大野川でのNPO法人河童倶楽部の活動で、河童小屋の建設、源流の碑建立際の活動など。
- ・ 番匠川での44団体のネットワークの例。楽しく仲間内で活動している。「おさかな館」が活動の拠点。
- ・ 筑後川における都市部との交流や、源流の森づくりの植樹活動、久留米大学の連携の事例など。エコマネーも導入している。「筑後川まるごと博物館構想」「筑後川流域1万人会議」「筑後川まるごとリバーパーク」などが参考になる。
- ・ 九州は台風被害が多いことから、水防組織対策を基盤にした市民の活動につなげていこうとしている。



写真－9 第3回派遣時の報告会
川上村役場にて

吉野川紀の川での流域連携について

- ・ 吉野川紀の川の流域協議会は、行政のメンバーだけで行っているの、発展しにくい原因があると思う。官主体の団体から、源流館等が中心となって、市民活動の連携を進めていくほうがよいと思う。
- ・ 連携の目的として、「川上宣言」というすばらしいものがあるので、これを活かさない手はない。流域の活動グループを各市町村にピックアップしてもらおう。まずは中心となる団体と人を掘り起こす。
- ・ それらの人を中心にイベントを協力して行う。各市町村で順次開催し、それぞれに積極的に参加し、地域を互いに知る。
- ・ 事務局は行政にしてもらい、実践部隊は市民活動グループへ広げる。それを動かすことによってネットワークを広げる。
- ・ 流域交流を観光に活かしていくうえでも、「森、川、海をつなぐ水のみち吉野川・紀の川」などのキャッチフレーズを設けて取り組んでいってはどうか。

- ・ 行政の境界を越える意識をもって、行政情報が行き交っていないところをどう交流するかが大切。
- ・ 行政の感性の良さがないと、住民はついてこない。
- ・ これからの観光は「間交」（交流）「観交」（観て交わる）「観考」（みて考える）「観輝」（輝いているもの、人を見る）「感講」（感じたことを講じる機会をもつ）
- ・ 村だけの観光ではダメ。広域でスタンプラリーなどの工夫を行う。
- ・ 「観光と食」「観光と福祉」「観光と学習」などを結びつける。



写真-10 第3回派遣時の報告会
川上村役場にて

観光と地域づくりの提案

- ・ 「源流学」を学ぶ、“大学”をつくってしまっただろうか。（「吉野川大学」など）
- ・ 施設や村民から楽しみながら学び単位を取るしくみ。このときも川上宣言を活かす。
- ・ 郷土料理の研究、温泉の研究など、団塊の世代が関心を抱く身近なテーマ。
- ・ これだけある施設を有効にいかす。
- ・ 地域づくりは3K。「広域・回遊・交流」
- ・ 村内の回遊ルート。交通機関、案内人を整え、対象者にわかりやすく伝える。
- ・ 川上宣言を大切に。実践活動について掘り下げて考える。誰が誰に向けて訴求しているか、現状を評価する。
- ・ たとえば「下流にはきれいな水を流す」に対しては、「リベイラ・ウエス」（油汚れをおとすボロ布の配布など）
- ・ 宣言に基づいて、やっていることを打ち出す。実践をもって、宣言をあらためて訴求する。
- ・ PRすること。中にいるものは、その財産に気づくこと。もっと地域の財産を活かす。

その他アイデア

〔 観光の核となるホテルに関するアドバイス
（山香町風の郷の総支配人としての立場で） 〕

- ・ 道の駅売店とホテル売店の品揃え、売り上げは競うべき。
- ・ 従業員の都合はお客様には主張しない。（就業時間など）

- ・ 客室ごとに責任者をおき、装飾やサービスを競っている。
- ・ ホテルに残ったタオルを雑巾にして販売。
- ・ 家庭から持ち寄ったリサイクル品の販売。
- ・ ホテルの従業員の声をきくアイデアカード（提出者には、温泉チケットを進呈）。
- ・ 自分を変える12か条などを従業員教育に生かす。

3. 村としての将来ビジョン

アドバイスを得て（再）認識したこと

- ・ 源流の思いを伝えたいということが強すぎて、流域から見る、あるいは感じるための、分かりやすさに欠けている。
- ・ 村内の施設がそれぞれに動いている。まずは村内の連携を図ることが、流域連携への第一歩となる。
- ・ 森と水の源流館だけではできない。
- ・ 村内の人材について調査することを進める。（得意分野や報酬の希望についてなど）

短期的に取り組みたいこと

- ・ 村内施設によるスタンプラリーを平成19年4月よりスタートし、毎月開催する情報連絡会議において、来村客の動向分析や対策について協議していくこととした。
- ・ 吉野川紀の川流域協議会において、水源地を訪れ学ぶ（研修など）機会を提案し、まずは源流の取り組みと環境を知ってもらい、流域連携による保全への意識を醸成する。
- ・ また市民グループなど、非行政のネットワークづくりを目指す。そのきっかけとなる情報提供を吉野川紀の川流域協議会のメンバーに働きかける。
- ・ 子どもたちの森林環境教育のサポートや、子どもたちの発表の機会を使って、川上村の取り組みを流域住民に実感してもらおう。
- ・ 村内ホテルの利用促進の観点からも、森づくりや水源地を見るなどの企業研修を積極的に受入れ、流域や都市部との民間レベルでの交流を具体的に行う。

中長期的に取り組みたいこと

- ・ 「和歌山市民の森」につづく、流域市町村の「森づくり」や「体験」事業の受託を目指す。
- ・ 川上宣言を柱に、既存の宿泊施設と体験学習施設を拠点に、川上村での「源流学」体感・学習の提供を軸とした村全体での方針をまとめる。

- これに基づいた資源発掘、村民活用のための人づくり、それぞれの施設でのメニューづくりなどの役割分担を明確にし、村内では、同じ方向を向いて、進捗状況や課題が共有できるしくみをつくる。(源流学のカリキュラム、単位取得の特典など)
- 流域に対して、そのメニューの売り込みを行いながら、連携できるテーマや体験を新たなメニューとして組み入れて、広域に向けた吉野川紀の川ブランドの体験プランを近畿圏の都市部にPRをしていく。